

研究タイトル：

# 構文スキーマとその生産性をめぐって



氏名：	酒井 啓史 / SAKAI Hirofumi	E-mail：	hirofumi.sakai@tsuruoka-nct.ac.jp
職名：	助教	学位：	修士（言語学）
所属学会・協会：	日本英語学会、日本認知言語学会、日本言語学会、英語語法文法学会、筑波英語学会		
キーワード：	理論言語学、英語学、構文文法、動詞意味論、構文スキーマ、非定形節		

- 技術相談  
提供可能技術：
- ・構文文法全般、特に英語の動詞が関わる現象
  - ・構文スキーマとその生産性に関すること
  - ・言語能力と一般認知能力の関係
  - ・言語進化に関すること

## 研究内容：

### 現在進行中の研究

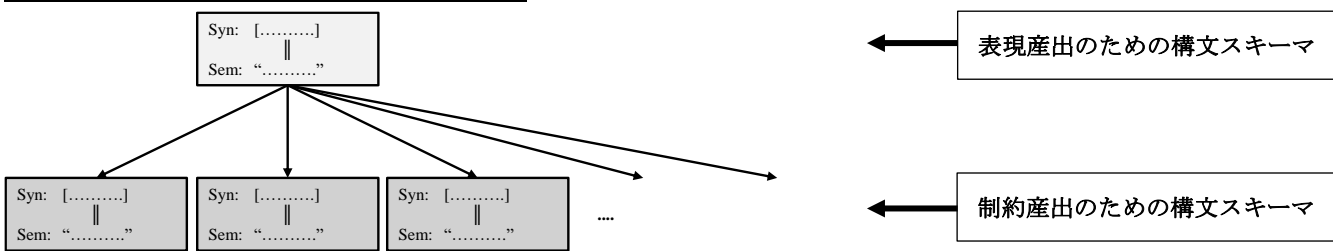
#### ◆動名詞補文の意味上の主語は何によって決定されるのか

英語では、動名詞が動詞の補部位置に生じることがあるが、この動名詞補文における意味上の主語は主節主語と同一指示になる場合もあれば、非同指示になる場合もある（指示指標は下付き文字で表す）。

- (1) He<sub>i</sub> tried <sub>i</sub>frying the mushrooms. [同一指示]
- (2) The psychiatrist<sub>i</sub> recommended <sub>j</sub>getting away for a week. [非同指示]

このような動名詞補文に関する同一指示性の背後にどのようなメカニズムが働いているのか、長年理論言語学では議論されてきたが、デフォルトとは異なる同一指示性を示すもの（以下、有標的同一指示性）については、必ずしも十分に扱われているわけではない。例えば、動詞 *avoid* は通常は同一指示となる動詞だが、文脈を整えると非同指示となる。

(3) The environmental protection staff<sub>i</sub> enclosed the sanctuary with fences in order to <sub>i</sub>avoid <sub>j</sub>hunting elephants. こういった有標的非同指示となるものについては、語用論の問題とされ、関心が大きくは払われていないか、関心が払われている場合でも、包括的かつ原理的な説明にまでは至っていない。本研究では、拙論 Sakai (2022) や酒井 (under review) を発展させ、構文文法の観点、特に上位構文の役割に着目して、当該同一指示性について原理的説明可能性を追求する。簡単に言えば、**抽象的でスロットが指定されていない上位構文は実際に様々な表現を産出する際に機能し、具体的にスロットが指定されている下位構文はスロットに対する制約抽出のために機能していると現時点では考えている**。本研究の理論的意義は、上記の可能性を追求していくことで、構文文法における**構文スキーマの抽象度合いとそれぞれの役割についての理解をより深めること**にある。



### その他興味・関心

人間言語の言語能力と音楽の能力、言語進化の関係については生成文法の観点から盛んに研究されているが、構文文法の観点での研究は多くはない。それを踏まえて、構文文法の観点から新たな視座を加えることを目指している。

### 提供可能な設備・機器：

名称・型番(メーカー)	